大地

第　66　号
2022.6.1. 発行
浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

役終えし絵馬カラカラと旅薄暑

気の重きこと背にたたみ夕端居

湯上りの懐暖め団扇風

西の茶屋とや細格子石蕗の花

経版木六万枚や堂の冷

老斑も生きし証や枇杷の花

句集『朝の光』より
平成十一～十三年

安い言葉に課税

山崎隆史

先だって、改元から四年も経とうというのに「令和最初」という言葉を耳にしました。まだ言うのかと驚くとともに、あの頃はひどかったなぁと思いだしました。

平成から令和に改元される少し前、テレビや新聞、雑誌では「平成最後の」という表現があふれました。何かというと平成最後の何々、平成最後の何々。改元したら今度は「令和最初の」の番です。朝から晩まで令和最初の何々、令和最初の何々。

同様に、２０００年の年末から翌２００１年の年始にかけて、「二十世紀最後」「二十一世紀最初」という表現が氾濫していました。何でもかんでも二十世紀最後の何々、二十世紀最後の何々。寄ると触ると二十一世紀最初の何々、二十一世紀最初の何々。が、前年は「２０００年問題」で大騒ぎだったのと、毎年の年末年始の騒ぎの延長として捉えていたので、そんなに気になりませんでした。

平成から令和の改元の場合、改元日の発表の頃から浮かれっぱなしで、ずっと平成最後、平成最後と連呼していました。日がな一日平成最後の、平成最後の。改元後も同じ調子で令和最初、令和最初。猫も杓子も令和最初の、令和最初の。うんざりして、「平成最後税」とか「令和最初税」を新設してほしいと思ったものです。「平成最後」「令和最初」を一回使う毎に税金を納めるのです。

元ネタは、子供の頃に読んだ、作家さん達の座談会です。「マル秘」という言葉を使うたびに税金を徴収する「マル秘税」というのを新設してはどうか、という冗談があったのです。当時、新聞のテレビ欄とか週刊誌の記事のあおり文とかで、やたらと「㊙」が使われていて、その作家さんはうんざりしていたようです。

個人的には「神」とか「奇跡」という表現にうんざりしています。「かなりすごい」という程度で「神」と言ったり、「相当珍しい」程度の出来事を「奇跡」と言ったりします。「奇跡の神映像５連発」だなんて、連発できるようなものに「奇跡」とか「神」を冠するのはいかがなものかと、誰でも思うのではないでしょうか。「神税」「奇跡税」はどうでしょうか。

とは言え、実は自分自身も「思ったよりだいぶ悪い」程度の事でも「最悪」と言ってしまうなど、おかしな言葉づかいをしています。子供の頃には「一生に一度のお願い」を何度もしたり、簡単に「いのちかける」などと口にしたものです。個人には非課税で、お願いします。

知識と知性と

山﨑　直子

二十一世紀です。ミレニアム問題などという、今の若い人には「？」だろう騒ぎももう、二十年以上前のことになりました。二十二世紀生まれ(正確には二千百十二年)というドラえもんの誕生も、あと九十年ほどだそうですよ。

二十一世紀です。宇宙の旅をする映画を撮った監督さんの当ては少し外れてしまったようですが、月の土地を勝手に所有しようとしたり売り出したりする人がいる不思議な時代になりました。

二十一世紀です。猛暑に酷暑に大寒波に、「異常気象」を当たり前にして私たちは暮らしています。

二十一世紀です。平和を目指して作られた国際連合の成立から、今年で七十七年です。

二十一世紀です。二十世紀の次なのですから間違いなく二十一世紀、なのですが、未だに国境を接する、独立した、主権あるひとつの国家に対してミサイルを撃ち込む国があるのだと、私達は連日まざまざと見せつけられています。

一方的な侵攻からはや三ヶ月が過ぎて、長期戦が予想されるこの戦いですが、一度国外へと避難したウクライナの国民が再び戻っているという報道もあり、あのような状態の中であっても、いくばくかの日常を取り戻そうとする人々の姿に胸の痛くなる思いがします。住み慣れた場所を追いやられ、あるいは占領され、傷つけられる。親しい人たちと遠く離れることを余儀なくされ、ミサイルや機銃の音を隣にしながらそれでも祖国に残って戦わざるを得ない。そのような状況は、平和の恩恵に浸かって暮らす私達には想像しようとしても難しく、いままで日常と呼んできたものが成り立っている場所がいかに特別なのかを見せつけられる思いがします。世界各国から非難を受けてもなお国連で強弁を繰り返すロシア代表の表情からは未だに何も汲むことができませんが、そのような一方的な主張を繰り返すことが誰のためにもならないことを私達人類は過去を振り返るたびに思い出せるはずです。昔、特集されたアインシュタインの番組の中で紹介されていた言葉の一つに、

「知識が必要ならば図書館にいけばいい。本当に必要なのは知識を生かすための知性だ」

というものがありました。当時学生だった私は日々の学習での暗記事項の多さに辟易していたせいもあり「そうだ！」と思ったものですが、あれから随分たった今、知性が身についているかといわれると些か心許なかったりはして…。

それでも私達は本来、未来に生かすための知識を、過去を、過ちを含んだたくさんの歴史を持っているはずです。いま試されているだろう人類の知性が恥じなければならないものでないことを証明できるはずです。次の世代の、そのまた次の世代に残すべき歴史を正しく選ぶことができると信じたいのは、二十二世紀にはドラえもんがいるのだと夢見て育った世代の絵空事かもしれませんが、世界中で上げられる声の、老いも若きも男も女もない「No War」のうねりが持つ力は、けして絵空事では終わらないとも感じています。学んできた歴史をただの知識で終わらせないために。いつだって、この先の未来のために。

だから待っててね、ドラえもん。

歌の力

横浜市　梅澤　育子

五木寛之はその著『私の親鸞』に、終戦後十二歳の時の異国での体験を記しています。それは、行進するソ連兵の集団が目茶苦茶な

合唱を始めた。歌に合わせバラバラな歩調が自然に揃い、合唱も美しい旋律に変わったと、歌の力を記しています。昔も今も、歌は世の活力と考え、コロナ禍で心も疲弊し、マスクの離せない生活ですが、歌の活力で助け合い、人の命を守れと願い作詞をしました。

梅澤　育子　作詞

◇一ツとや　人の笑顔は美しく
　心を癒す　素となる
◇二ツとや　夫婦仲良く笑い声
　明るい家庭に　福来る
◇三ツとや　皆の楽しい食膳は
　心も栄養　大健康
◇四ツとや　世の中諍いある時も
　笑顔で解決　花が咲く
◇五ツとや　いつも絶やさぬ笑いこそ
　苦しみ悲しみ　乗り越える
◇六ツとや　無理でも笑って生きるなら
　幸せ運ぶ　人となる
◇七ツとや　泣き虫弱虫追い払い
　笑いの呼吸で　虫は外
◇八ツとや　病恐れず大笑い
　病魔退散　治療楽
◇九ツとや　困難笑顔で道すすむ
　幸せ迎える　光あり
◇十とや　とうとう世界の平和成る
　皆のニコニコ　拡がりて

退職にあたり想うこと

新潟市西蒲区　北上守夫

長い勤務を終え、本年六月をもって退職します。在職の法人三カ所で合わせ五十年余、その間、多くの人と出会い、支えていただきました。

私は、昭和四十二年新潟市内で県下最初の特別養護老人ホーム（以下「特養」と記載。）の任務にあたりました。現在県内での特養は三百を超す施設数になっています。当初、近隣には経験者もいなく、また、県外の施設への研修も思うにならず、ひたすら県・市の担当者に出向き、指導を受ける毎日でした。

その後、長岡に二番目の施設ができ、昭和四十九年には五番目の施設として上越地域に「いなほ園」が誕生しました。そのおかげもあって、研修会が開かれるようになり、担当者同士の情報交換も盛んに行われるようになりました。特に研修会後の宴席は大いに盛り上がりました。研修会でいつもご一緒でしたのが、前住職の山崎隆昌氏と長岡のH氏でした。お二方とお話を交わすことで自身気が晴れることも多くありました。

特に山崎隆昌氏には、悩みを掘り下げ相談に乗っていただきました。職場の組織、人間関係等々、特養の施設長は多くの人とかかわりを持ち骨が折れる仕事です。山崎氏は精神的にもお強い人で、多くのご助言をいただきました。私が、今日まで勤務を果たし終えることができましたのは山崎氏のおかげであり心から感謝しております。

これからも、お互いに好きなお酒でクラシック音楽などの話題で口角泡を飛ばしながら語り合う日が長く続くことを願っています。

山崎隆昌様、本当にありがとうございました。

※退職されるとのこと、ご苦労様でした。そして随分お世話になり、またご迷惑をお掛けしました。

北上氏は、高齢者福祉事務の生き字引の様な人で「分からないことは北上に聞け」が私たちの間でもっぱらでした。

話題は豊か、楽しい会話が続きます。特にクラシック音楽には好きで詳しい。演奏会にも何度かご一緒しました。

またご夫婦で山好き、時間を見つけては彼方此方の山を登坂されています。

何よりもお酒を飲みながらの歓談は、時間を忘れさせ気持ち良いものです。

小児科医の細谷亮太は「人間は、不思議な縁の中で生きている」と述べていますが、北上氏とも不思議なご縁です。

これからも淡いけれど永い交わりを続けたいと願っています　（山崎隆昌　記）

ワン公物語 ―華のつぶやき―㉖

山崎　華（慎子代筆）

私は華。パグ犬の女の子。十三歳九カ月と一年三カ月、あの日、息が止まらなかったら十五歳だったんだね。マ、イヽカ！

友だちのアズちゃんは、しんどい体で頑張って十六歳になったんだって。偉いナァ。

ところで私は、その名にふさわしく花が咲き乱れる庭に納められた。連休のある日、ハイジ姉さんや蓮姉ちゃんのお骨が納められている所に一緒に入れてもらったのだ。

すぐ傍らでは今にも咲きそうな鈴蘭が、ようこそ！と葉をふるわせ、辺り一面の苔たちも、やァ新入りかい、と迎えてくれたのだった。更紗木蓮が終わり、墓石の上にはピンクのつヽじが満開を誇り、幾重にも重なった楓がさわやかな 風を運んでくれる。

帰省していた昌子姉さんと家族の皆に見守られて、少しだけ涙ぐんでいるらしい母さんが、片方の掌に納まってしまう程の私の骨のそのあまりの軽さをかみしめた。そうして私の骨は、木の根のはびこる土の中に入れられ、父さんがそーッと蓋をして皆で手を合わせ、私の納骨は終わったのである。

父さん達の部屋の窓からも、二階の兄さん達の部屋からも、私達のお墓を望むことができて、雨の日などは窓越しに母さんが見つめているのが分かるんだ。

「千の風」ではないけれど、骨は土の中に還されても、私の思いは母さん達が思い出してくれる時には、いつもそこにいるからね。

母さんが時折思い出してしまうのは、私の火葬の日のことだ。母さんは、自分の母親が半月前に百三年の生涯を終えたばかりだったので、多分全くの平常心ではなかったのだと思う。

私の火葬は三月三十一日の朝に、柿崎の葬場に予約できたのだった。蓮姉ちゃんの時もお世話になって、職員の方の手厚い対応に、華の時もこヽでと決めてあったのだった

蓮姉ちゃんの時は、マサコ姉さんもタカ兄さんも一緒だった。ところが折悪しく事情が重なり、母さんは一人で柿崎に向かうことになってしまった。

助手席に横たわる私の亡骸に母さんは語りかけ、信号待ちでは、すっかり冷たくなってしまった私の体をなでて、柿崎に向かったのだ。職員の方は、とても心を込めて対応してくれたのだが、私がお骨になるまでの間、母さんは心細さを抱えてとりとめもなくあれを思いこれを思い待ってくれた。

お骨は可愛いピンクの箱に納めて頂き、その予想以上の軽さが、更に母さんの心を重くしたらしかった。お骨になった私との帰り道そのまヽ家迄帰る気にならなかった母さんは、大潟町の公園や頸城の坂口記念館を経て、三和の工業団地の桜並木を通り抜け、少し気持ちを落ち着かせて漸く家に帰ったのだった。

今でも時々、華、はなと呼ぶ母さんの声を聞くのだけれど、納骨を済ませたことは良いきっかけだったようで、前のように気持ちを沈ませることは減ったみたいなので、そうでなくっちゃネと私は思う。

忘れられてしまったなら、それはとても寂しいし残念だけど、元気にしてくれることが何より嬉しいんだってこと、忘れないでね。

それからね、母さんのお友達やいとこさん達が、それぞれ共に暮らしていたワンコとの想い出を書いて、母さんを励ましてくれるのは、母さんに力を与えてくれるらしいので有り難うございます。（ワン公の私がいうのもナンですが）

我々ワンコ仲間は、人間との生活の長い分また猫と違って性分としても、自分が犬だとは思っていない仲間が結構いるんだ、ということが分かった次第。それからお医者嫌いのワン公も全然珍しくないんだね。

そんなことで今回のつぶやき、おしまい。

（以下次号）